

## 批判主義に於ける自由の問題 (下)ノ一

中 林 嘉 太 郎

### 十一

吾人の自由は固より純我の自覺に於て成立する。然し乍ら是の如き純我の自覺に於て成立する自由も、若し夫が現實の世界に於て實現されないならば、夫は吾人に對して何等歴史的意義を有ち得ないであらう。茲に於て吾人は吾人の自由實現の地盤として、再び自然の世界に還り行くのである。自然必然性の原理によつて綜合統一されたる自然の世界は、嘗つて吾人によつて其の中に何等自由なるものなしとして放擲されたる所のものである。吾人は嘗つて吾人の自由の世界の探求に當り、凡ゆる自然的なるもの、必然的なるものを悉く捨離して、ひたすら内面的なるもの、精神的なるものへと吾人の眼を向けたのである。然し乍ら外面性を離れたる内面性、物質性を離れたる精神性は夫自身一個の抽象體たるに過ぎず、従つて又遂には夫自ら崩壊沒落の運命を免れないであらう。茲に於て吾人は物質價值の爲にではなく、

反つて唯精神・價值自身の存立の爲に、敢て物質價值を採り容れんとするのである。而も此の物質價值は凡て自然の世界に於て存在するものであり、自然の世界は斯くして自由の世界と密接不可分離の關係に立つのである。自由の世界によつて基礎附け (begründen) られざる自然の世界が無價值なると共に、自然の世界によつて基底附け (fundieren) られざる自由の世界も亦無内容なりと云はなければならぬ。唯一の具體的世界は唯自由と自然との完全に合致せる、或は兩者未分以前の世界である。理論理性批判の對象界たる自然の世界と、實踐理性批判の對象界たる自由の世界とは、斯くして密接不可分離の關係に立つのである。

然らば何故に吾人は吾人の自由の實現の爲に敢て自然の世界を必要とするのであるか。夫は要するに吾人の精神と身體との不可分離の關係に基くものに外ならない。吾人の自由は吾人の精神の自由であり、而も吾人の精神は吾人の身體を俟つて始めて存立しうるものであり、更に此の吾人の身體は自然必然性によつて規定される所の身體性によつて自然の世界に聯繫するが故である。換言すれば吾人の精神は吾人の身體なくしては存立し得ず、而も吾人の身體は吾人を取り圍く自然の世界なくしては存立し得ざるが故である。斯くして吾人の精神に於て成立する吾人

の自由の世界は、吾人の身體を媒介として自然の世界に聯繫するのである。自然の世界は自由の世界に對して、實に其の實現の地盤として必要缺く可からざる意義を有するものである。此の自然を地盤としての自由の實現の過程、夫を稱して吾人は歴史と呼ぶのである。

歴史現象は抑、如何なる意味に於て本質的に自然現象と異なるのであるか。如何に轉變を極むる壯麗なる現象と雖も、夫が吾人々類の自由意志によつて生起せしめられたる現象ならざる限り、夫は何等歴史現象の名に値しないであらう。之に反し如何に些細なる現象と雖も、夫が吾人々類の自由意志によつて惹起されたる現象なる限り、夫は最早單なる自然現象ではなくして、優に一個の歴史現象の名に値するのである。歴史現象に屬するか否かの區別は人間意志が加はれるか否かに存するのであつて、其の現象が大なるか否かに存するのではない。然し乍ら人間意志によつて生起せしめられたるもの悉くが歴史現象に屬するのではない。人間行爲によつて生起せしめられたるものと雖も、夫が歴史全體の見地より觀て何等特殊の意義を有せざる限り、夫は歴史現象と稱することは出来ない。歴史現象と稱さる可き限り、夫は恒に全體の立場より觀て何等かの價值を表現するものでなければならぬの

である。固より如何に些細なる現象と雖も、歴史全體の構成のためには一として缺く可からざるものであり、現在の此の瞬間に於ける歴史の斷面は、過去の凡ゆる現象を残る限なく止揚・廢棄・舉揚・貯藏してゐるとも云はれ得るであらう。是の如き全體の直觀の立場に立つ限り、吾人は歴史的に價值あるものと然らざるものとを區別することが出来ないのである。一として皆歴史構成のために意義なきはない。而も尙吾人は歴史研究の上に於て歴史的に價值あるものと然らざるものとを區別しなければならぬのである。如何なる點に於て其の區別の標準は求めらる可きであるか。要するに夫は唯比較的の意味に於て、全體精神を表現すると否とに求めらる可きであらう。全體精神の自覺の立場に於て爲された行爲或は事業が歴史的に意義あるものであり、然らざるものが歴史的に意義なきものである。全體精神を表現すること大なれば大なる程、其の行爲或は事業の歴史的意義は大であり、全體精神を表現すること小なれば小なる程、其の行爲或は事業の歴史的意義は小である。然し乍ら是の如き規定は單に相對的見地の下に於てのことであつて、絶對的見地の下に於てのことではない。絶對的見地の下に於ては如何に些細なる現象も凡て何等かの程度に於て全體精神を表現してゐるのである。全體の直觀の立場に立つ神の

見地の下に於ては、世界の如何なる現象も凡て皆或る程度に於て神性を表現してゐると云はなければならぬ。固より是の如き全體の直觀の立場に立つことは、有限なる理性能力より以外に所有し能はざる吾人々間に對しては許さる可くもない。

有限的存在者としての吾人人間の認識に於ては、善は飽く迄も善であり、惡は飽く迄も惡である。また價值は飽く迄も價值であり、反價值は飽く迄も反價值でなければならぬ。然し乍ら是の如き相對的認識の立場に終始し乍ら、而も吾人は正邪善惡の立場を超えて其の根源に立つ絶對的認識の立場を、少くとも理念として所有することが出来る。吾人の日常生活に於ける價值判斷は、凡て是の如き超價值の判斷を根柢としてのみ思惟され得るであらう。或は是の如き諦觀的態度を俟つ迄もなく、人類の意志によつて生起せしめられる現象は凡て合目的に、一定の價值の實現に向つて努力してゐると判斷され得るでもあらう。此等の現象が個々の主觀に於ては如何に紛糾錯雜して一定の秩序なきが如く見えようと、而も人類全體の見地の下に於ては、恒に全體價值の實現の爲に寄與してゐると云はなければならぬ。一事一物として人類歴史の發展にとつて意義なきはないのである。然る限り吾人は人類の意志によつて生起せしめられたる現象に就て、其の歴史的に價值あるものと然ら

ざるものとを、嚴密なる意味に於て區別することは出来ないのである。唯比較的の意味に於て、全體精神を表現すると否とによつて之を爲さんとするのである。歴史全體の見地に於ては、凡て皆夫々の立場に應じて何等かの程度に於て、全體價值の實現に向つて參與してゐると云はなければならない。

然らば全體精神を表現する人類の意志現象とは抑、如何なる現象であるか。人類の各員が其の日常生活に於て營む所の意志行爲も固より一種の意志現象ではある。然し乍ら夫等の行爲が單に個人的なるものによつて動機附けられてゐる限り、夫等の行爲は全體精神の自覺の立場に於て爲されてゐると云ふことは出来ない。全體精神の自覺の立場に於て爲されたる行爲とは、其の行爲が單に個人的なるものを超えて社會的なるものによつて動機附けられてゐるものである。如何に豊富なる結果を齎す所の行爲と雖も、其の行爲の動機が單に個人的なる限り、夫は何等歴史的價值を有つことは出来ない。歴史的價值を有する所の行爲とは、其の行爲の動機が専ら社會的なる場合である。此の社會的動機によつて動機附けられる所の行爲の主體、夫は時として個人であり、又時としては集團でありうるであらう。然し乍ら夫等の行爲其者は恒に社會的動機によつて動機附けられてゐなければならないの

である。社會的動機によつて行爲する所の個人は個人にして個人に非ず、一個の集團であり、同様にまた社會的動機によつて行爲する所の集團は集團にして集團に非ず、一個の個人である。要するに唯社會的動機によつて行爲するか否か、問題なのであつて、個人であるか集團であるか、問題なのではない。而も亦翻つて他方より之を考へるならば、社會精神の自覺によつて行爲する所の個人と雖も、自己に於て自覺されたる精神を原理として統一されたる集團を豫想することなくしては、社會的價値ある實踐運動を爲すことが出來ず、また社會的に價値ある實踐運動を爲す所の集團と雖も、其の集團を統一して之に原理を與へる所の個人を豫想することなくしては、社會精神の實現を期することが出來ないであらう。要するに社會精神の實現に於ては、社會精神の把持者としての個人の意識を意識とする集團、及び社會精神の運載者としての集團の意識を意識とする個人、換言すれば個人にまで凝結されたる集團及び集團にまで解消されたる個人が必要なのである。是の如き意味に於ての個人或は集團を主體とする意志行爲、夫が歴史的に價値ある所の意志現象である。吾人が曩に「十」に於て社會道德の根本問題として個人、の自覺なるものを強調したのは正に之に因るものである。個人の自覺に於て自覺される所のものは——若し其

の自覺が眞の自覺であるならば——個人的なるものではなくて寧ろ社會的なるものである。然る限り個人の自覺の立場が依然として社會道德の問題を解き得るのみならず、個人の自覺の立場のみが眞に社會道德の根本問題を解決しうるのである。固より是の如き個人の自覺に於て自覺される所のものは如何に夫が社會的なるものなりとは云へ、夫は現實的社會的なるものではなくて、理想的社會的なるものである。社會が物に仕ふるの聲を自己に於て自覺する自覺ではなくて、社會が神に仕ふるの聲を自己に於て自覺する自覺である。其の限り是の如き個人の社會的自覺の立場と雖も、尙現實の社會問題を解決し得ざることは一應承認されなければならぬであらう。然し乍ら個人の自覺の内容を形成する所の社會的なるものに就て、其の形式と實質とを斯の如く峻別することは固より疑問に屬するのみならず、寧ろ道德の形式は無限の、但し形相化されたる實質を自己の衷に包攝してゐるものと見らる可きものなるが故に、個人の自覺に於て自覺される所の社會的なるものは、當然現實的なるものと理想的なるものととの兩契機を具備してゐると云はなければならぬ。然る限り個人の自覺も社會道德の解決に當つて何等不可なきのみならず、また其の解決の根本問題を形成するであらう。即ち實踐の主體としての個人或は集團



が、社會精神の自覺の下に於て爲せる意志行爲のみ、始めて歴史現象の名に値するのである。

## 十二

吾人は以上に於て社會精神の自覺の下に於て爲せる人類の實踐のみ、始めて歴史現象を生起せしめ得ることを論述した。然らば社會的實踐の主體によつて自覺さるべき社會精神の本質は抑、如何なるものであるか。夫は云ふ迄もなく現實の世界を地盤として理想の世界を實現せんとする意志に外ならない。如何に吾人人類に對して人類の理想なるものが與へられようと、若し夫が其の實現の地盤たる現實の世界を有たないならば、夫は單に抽象的理想に陥り、何等具體的意義を有ち得ないであらう。また如何に吾人人類に對して現實の世界が與へられようと、若し吾人が夫を地盤として人類の理想を實現しないならば、夫は單なる自然の世界に墮し終り、吾人に對して何等價值ある世界とはなり得ないであらう。吾人人類が歴史生活を營み行く可き唯一の具體的世界は、現實を地盤として理想を實現し行く世界である。而して是の如き、現實世界を地盤として理想世界を實現せんとする意志が即ち社會精神の本質を形成する所のものに外ならない。「自然が其の解決を、迫る所の、人

類に對する最大の問題は、普遍的に法を行ふ市民社會の達成である。(Kant, Idee zu einer allgemeinen Geschichte usw., Fünftes Satz.) 蓋し人類の究竟目的は人間性の完全なる發達である。然し乍ら若し人類の棲息する社會にして、是の如き人間性の完全なる發達を阻害するが如き諸條件を保有する時は、吾人は到底人類の完全なる解放を望む事は出来ない。人類が其の人間性を完全に發展せしめ得べき社會は、此等人間性の發展を阻害すべき諸條件を外的強制によつて抑制する所の權力を行使する社會である。茲に於て社會の各員に對して普遍的に法を行ふ市民社會を完成せしめる事が、自然によつて與へられたる人類の最大の課題となるのである。(固よりカントが茲に人類の理想社會としての市民社會 (Die bürgerliche Gesellschaft) と云へるものは、現代の所謂個人主義社會に外ならないであらう。其の限り吾人は茲に個人主義的觀念論者としてのカントの片鱗を認めざるを得ないのである。然し乍ら之がカントの時代に於て考へられ得べき唯一の理想社會であつたとすれば、吾人は寧ろ其の用語に捉はるゝことなく、反つてカントの眞意の在る所を汲んで、之を現代の吾人として考へられ得べき最高完全の理想社會として理解して差問へないであらう。) 要するに人類の人間性が完全に解放さる可き社會を實現せんとする努力が、即ち人類

の歴史生活の意義を形成するものに外ならない。「吾人は人類の歴史を一括して、内面的に完全なる而してまた此の目的のために、外面的にも完全なる國家憲法——夫に於て人類が人間性に於ける彼等の凡ゆる素質を完全に發展し得べき唯一の状態としての——を實現する爲の自然の隠れたる計畫の完成として見做すことが出来る。」<sup>20</sup> (Kant, Idee zu einer allgemeinen Geschichte usw., Achter Satz.) 實に此の地上に於ける

理想國家の建設、夫が批判主義に於ける歴史概念の根幹を形成する所のものである。現實國家は夫が國民國家(Nationalstaat)なる限り、他國民の侵略に對して配慮を怠らざる範圍内に於てのみ、自國民の人間性の發展を期することが出来るのである。國家の對外配備を廢止して迄も國民の精神生活の解放を期することは、夫が國民國家なる限り、恐らく不可能事に屬するであらう。他國民の侵略に對する配慮のために、如何に自國民の精神生活に必須なる顧慮が無視されてゐるかは、蓋し看取するに難くない所である。然し乍ら現實國家が國民國家であり、而して現代に於て此等相互に鬭爭する諸國民を統制する機關が何等成立して居ないとすれば、他國民の侵略に對して自國民を保護する機關なるものは、當然其の存立の意義を承認せられなければならないであらう。固より夫は自國家の存立保護てふ最小限度の意味に於ても

のであつて、何等他國家の侵略といふが如き積極的意味に於てのものであつてはならない。而も現實世界に於ける萬物が鬭爭によつて發展し、鬭爭によつて成立してゐるが如く、現實國家としての各國民國家も鬭爭によつて發展し、鬭爭によつて成立してゐるのである。此の國家鬭爭としての戰爭を通じて、諸國民國家は辨證法的に漸次より高次なる國家統一へと導かれるであらう。吾人は其處に國民國家の歴史的發展の嚮導理念としての世界國家(Weltstaat)なるものを思惟することが出来る。

固より夫は單に一個の理念たるに過ぎない。而も夫は各時代に於て諸國民國家の概念に内在して、其の歴史的發展の原動力として機能する所のものである。何等かの意味に於て人類歴史の理想を實現することを意圖することなくしては、如何なる國民國家も遂には滅亡の運命を免れないであらう。其の國家生活の過程に於て、全體的にではなくとも少くとも部分的に、世界國家の理想の實現を志向することが、現實國家としての國民國家の任務でなければならない。世界の國民國家相互間に於ける國家鬭爭(Statenkampf)は、概括して世界國家實現の爲の豫備段階として見られるでもあらう。固より是の如き理念としての世界國家に於ても、現實の國民國家の存立が全然否定されるのではなく、反つて夫等國民國家の特殊性が充分に承認さ

れつゝ、而も夫等の間に辨證法的統一が保たれるのでなければならぬ。是の如き人類歴史發展の窮極目標たるべき理想社會としての世界國家の建設、夫が批判主義歴史理論の根本精神を形成する所のものである。或は之を自然を地盤としての價値の實現と云ふも可なりであらう。而も茲に於て實現さるべき價値は單に特殊的なる個體價値 (Individualwert) ではなくて、反つて一般的なる全體價値 (Totalwert) でなければならぬのである。是の如き全體價値の自覺の下に行動する所に吾人の歴史的意识は成立するのである。歴史とは斯くして畢竟するに現實世界に於ける人類價値の實現の過程に外ならないのである。カントに於て計畫され (Kant, Idee zu einer allgemeinen Geschichte in weltbürgerlicher Absicht.) ヲーゲルに於て完成された (Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte.) とも見らるべき理想主義歴史哲學の基礎概念は、實に此の、自然に於ける人類の自由實現の過程に終始するのである。

### 十三

吾人の歴史的意识は是の如く全體價値の自覺の下に行動する所に於て成立する。吾人の道德的意识も亦是の如き全體價値(人類價値)の自覺の下に行動する所に於て成立するものに外ならない。然らば吾人の歴史的意识と道德的意识とは抑、如何な

る點に於て根本的に異なるのであるか。單に價値の自覺の下に行動する所に於ては、未だ眞の歴史的意識といふべきものは成立しない。眞の歴史的意識が成立せんが爲には、價値を自覺しながら而も反價値的に行動する面がなければならぬのである。然らざれば夫は合價値的に行動する自然的意識に外ならないであらう。吾人の歴史的意識は唯、善を明らかに意識しながら而も不可避免的に惡を犯す所の、吾人の二元的性格に其の根源を有つのである。單なる價値の自覺は未だ道德的意識たるに過ぎない。價値を自覺しながら而も反價値的に行動せざるを得ない所に、始めて吾人の歴史的意識は成立するのである。人類の歴史は人類が其の反價値的自由の能力を行使した所に於て始まるといふも不可ないであらう。道德的意識は茲に於て始めて其の具體的意義を有ち來るのである。單なる道德の世界は未だ抽象的世界たるに過ぎない。夫は唯歴史の世界に轉化して始めて具體的世界となるのである。價値を自覺しながら而も不可避免的に反價値的に行爲し、反價値的に行爲せる事を反省することによつて、夫を止揚して更に高次の立場に於て價値の實現を志向する所に吾人の歴史的意識は成立するのである。人類の歴史は概括して是の如き意味に於ての價値實現の過程として見られ得るであらう。吾人が曩に「十」に於て批判

主義に於ける歴史的自由の概念として規定せる所のものは正に之に外ならない。

道徳的自由が従法則的自由 (Die untergesetzliche Freiheit) として規定せられたのに對し、歴史的自由は反法則的自由 (Die antigesetzliche Freiheit) として規定せられるでもあらう。法則を明瞭に意識しながら而も法則に背反して行爲する所の、此の反法則的自由に於て、人間的自由 (Die menschliche Freiheit) の本質は成立するのである。徹頭徹尾法則に従つて行爲する所の自由は神の自由であつて人の自由ではない。人の自由は唯法則を明瞭に意識しながら而も法則に反して行爲する所に成立するのである。是の如き意味に於ての人間の自由のみが人類歴史の原理たり得るものである。然し乍ら單なる反法則的自由が歴史的自由なのではない。法則を明瞭に意識しながら法則に背反して行爲し、而も其の反法則的行爲が止揚的契機となつて、更により高次の立場に於て法則の實現に向つて努力することに於て歴史的自由は成立するのである。是の如き意味に於ての人類の價值實現の過程が即ち人類歴史に外ならない。かくして人類の歴史は永久に到達すべからざる理想追求の努力の過程となるのである。吾人は茲に追求の論理 (Logik des Nachstrebens) としての批判主義の特徵を見るのである。

人類の歴史生活を價值實現の過程として、或は理想追求の道程として規定するとは固より不可なき所である。人類の生活に於て、何等か價值的なるもの、理想的なるものを豫想することなくしては、夫は動物の生活と何等選ぶ所なく従つて人類の歴史を動物の歴史より區別する何者も吾人は發見し得ないであらう。人類の歴史生活は唯、人類によつて實現せらるべき價值或は人類によつて追求せらるべき理想を豫想することによつて、始めて其の意義を有ち來るのである。従つて人類歴史を價值實現の過程として規定する批判主義歴史哲學は、人類歴史の本質を道破せるものとして不朽の意義を有しなければならない。吾人は之に對して何等の抗言をも爲さんとするのではない。然し乍ら人類の歴史生活が、果して是の如き價值實現の過程としての規定によつて、其の全面を盡し得るか否かは、固より疑問に屬する所ではない。人類の歴史を價值實現の過程として規定する時、人類の歴史に於ける諸々の反價值的現象は如何にして其の歴史の意味を有ち得るであらうか。之を人類の價值實現の Triebfeder として規定するとしても、夫は單に副次的に人類歴史に於ける反價值的現象の存立意義を承認したのみであつて、未だ夫の獨自なる存立意義を解明したのではない。固より人類歴史に於ける反價值的現象に何等獨自



なる意義なければ則ち止む。苟も夫が一個の現象として、價值的現象に對し同等の獨立性を以つて生起する限り、夫は單に價值的現象に對して從屬的意義を有するのみに止まらないであらう。人類の價值實現の Triebfeder として、人類歴史に於ける反價值的現象を規定することは、反價值的現象の獨立的意義を否定するのみならず、人類歴史其者の意義をも狹義に限定しすぎるであらう。吾人は茲に於て、自然的時間 (Die natürliche Zeit) なる概念に對して、歴史的、時間 (Die geschichtliche Zeit) なる概念を考へざるを得ないのである。單一の次元を有するにすぎざる自然的時間に於ては、凡ゆる現象が唯同質的一様性を以つて生起し経過し行くに過ぎないのであるが、無限の次元を有する歴史的時間に於ては、凡ゆる現象が皆異質的多様性を以つて生起し経過し行くのである。人類歴史を人類の價值實現の過程として規定する時、夫は人類の歴史過程を單に一樣なる繼起關係の連續に墮せしめるであらう。是の如き立場を以つてしては、人類歴史の本質を把握することが出来ない。自然的時間の概念を以つて歴史現象を説明せんとするならば、歴史は單に人類の價值實現の自然歴史と爲り了り、何等本來の意味に於ての人類歴史とは爲り得ないであらう。夫は畢竟吾人を驅つて無歴史主義 (Ahistorismus) に導く所のものに外ならない。人類

歴史は何等價値の實現てふ如き一定の方向によつて律せらるべきものではなく、無限次元の立場に於て凡ゆる現象——夫が合價値的であれ、反價値的であれ或は無價値的であれ——を生起し經過し行かしまむべき無方向の方向 (Richtung ohne Richtung) を有するものとして規定されなければならない。歴史の過程に於ける各々の瞬間は、凡て夫々に獨自の意味を有するものであつて、何等夫以前のもの或は夫以後のものによつて限定せらるべきではない。現在は現在の現在であつて、過去の現在でもなく、また未來の現在でもないのである。夫々の瞬間が凡て直接に神に接してゐると思なければならぬ。歴史的经验は茲に於て宗教的经验と其の軌を一にするのである。追求の論理 (Logik des Nachstrebens) は茲に安息の論理 (Logik des Ruhens) となつて始めて吾人の歴史生活の本質を把握せしめ得るのである。

#### 十四

安息の論理によつて歴史を説明せんとしても、夫は然し乍ら人類の努力による歴史の發展を無視して、單なる諦觀の立場に立たんとするのではない。是の如き立場は寧ろ安逸を貪るもの、怠惰に墮するものとして、吾人によつて最も却けらるべきものである。人類歴史に於ける幾多の偉大なる事業は、人類の確固たる價值意識

なくしては如何にして爲され得たであらうか。強固なる價值意識こそは、人類をして恒に發展せしめて息まざる所のものである。然し乍ら單なる價值意識は、人類の生活をして恒に永久に到達すべからざる理想の追求に終始せしめ、従つて歴史過程に於ける現在を、單に未來の現在或は過去の現在たらしめて現在の現在たらしめない。是の如きは眞に歴史生活の本質を究明する所以とは云ひ得ない。歴史生活に於ては、現在が未來の當爲によつて規定され乍ら、而も單に當爲意識のみを以つては説明すべからざる所の何者かによつて規定されてゐなければならぬ。歴史的意識は茲に於て正に超價值的意識によつて裏附けられたる價值意識であるとも云はれ得るであらう。従つて夫は何等無道德主義 (Amoralismus) を將來する恐れのあるが如き立場ではない。價值意識を内に包攝し乍ら而も夫を超越せる意識でなければならぬ。之を超價值的意識と呼ぶも、或は包價值的意識と呼ぶも可なりであらう。歴史的意識の本質は正に是の如きものに外ならないのである。人類の凡ゆる理想追求の努力意識を却けて、總ての現象を唯「よし」として規定する諦觀的立場が、人類の歴史生活の本質を解明し得ないと共に、また一定の嚮導理念を定立して此の理念の實現を窮極目的とするが如き當爲的立場も亦人類の歴史生活の本質を究明す

る所のものではない。人類の歴史は一定の價值意識を内に包攝し乍ら而も之を超越し、超越し乍ら而も其の實現に向つて努力する所の生活過程でなければならぬ。是の如き立場に於てのみ人類の道德生活の本質が解明され得ると共に、是の如き立場のみが眞に人類の道德生活の意味を究明し得るのである。道德と歴史とは茲に於て始めて密接なる聯關に立つのである。道德は歴史を俟つて始めて其の具體的地盤を見出すと共に、歴史は道德を俟つて始めて其の價值的根據を見出すのである。吾人が人類歴史を無方向の方向を有するものとして規定する時、夫は決して人類の理想追求の努力の價值を無視するのではなく、反つて寧ろ人類の此の道德的努力を眞に活かしめんが爲に、之を更により高次なる超價值的立場に於て認識せんとするのである。價值的立場を全然放棄し能はざることとは依然として淪りなき所である。然る限り唯心史觀(Die idealistische Geschichtsauffassung)\*としての批判主義歴史哲學も依然として其の重要な意義を有しなければならない。

\* 茲に Die idealistische Geschichtsauffassung を唯心史觀と譯することに就ては、或は異議が有るかも知れない。夫は正當には觀念論的史觀とも譯るべきものである。然し乍ら Die materialistische Geschichtsauffassung が唯物史觀と譯されるのに對し、自分は今假りに之を唯心史觀と譯して見たのである。Materialismus に對立する Idealismus は歴史的には、カントの批判主義の洗礼を受けたる Spiritualismus に外ならないとも見られ得るが故に、此の譯語も敢て不當ではないであらう。

然らば人類の歴史を人類の價值實現の過程として規定せんとする時、吾人は何によつて之を判斷せんとするのであるか。個々の歴史現象を觀察して之より一定の法則を誘導し、夫によつて人類歴史を人類の價值實現の過程として判斷せんとするが如き態度は、固より獨斷的態度として却けられなければならない。是の如き限定判斷 (Besimmungsurteil) の立場に於ては歴史の判斷は成立しないのである。吾人は決して自然科学的意味に於ての歴史法則を發見し、また之を樹立することを得ないのである。自然科学的に樹立されたる歴史法則は、歴史の自然法則であつて、歴史の歴史法則ではない。是の如き立場に於ては眞の歴史法則なるものは決して樹立されないであらう。人類の價值實現の過程としての歴史の判斷は、たゞ個體的なるものに於て全體的なるものを想定せんとする反省判斷 (Reflexionsurteil) の立場に於て爲されるのである。個々の歴史現象を分析して其處に一定の法則を見出し、此の法則によつて歴史を價值實現の過程として證明せんとするのではなく、たゞ個々の歴史現象に於て反省的に普遍的なるものゝ顯現を認識し、之によつて歴史を價值實現の過程として判斷せんとするのである。分析的普遍の認識によつては、綜合的普遍の認識によつて歴史の判斷は爲されるのである。もとこれ人類の歴史を人類

の價值實現の過程として、換言すれば人類の歴史を人類の合目的的作用の過程として判斷せんとすることより來る當然の歸結でなければならない。反省判斷は *Urteil des Mechanischen* ではなく、反つて唯 *Urteil des Teleologischen* である。此の反省判斷の立場に於てのみ、人類の價值實現の過程としての人類歴史の判斷は爲されるのである。

### 十五

吾人は批判主義に於ける歴史概念を、人類の價值實現の過程として、換言すれば理想社會建設の爲の人類の努力過程として規定した。然し乍ら人類の歴史は果して單に人類の價值意識或は理想意識によつてのみ運轉され得るものであるか。吾人は茲に唯心史觀としての批判主義歴史哲學の被限界性 (*Begrenztheit*) を認めざるを得ないのである。人類の價值意識或は理想意識は固より或る意味に於て人類歴史の動力たり得るであらう。然し乍ら人類歴史が單に之のみにて運轉され得るか否かは、固より疑問に屬する所でなければならぬ。唯物史觀 (*Die materialistische Geschichtsauffassung*) が人類の精神生活を凡て人間生活の上部構造として、其の下部構造たる物質生活の組織の變動に従つて、其の上部構造たる觀念形態の變動を主張する時、吾人は夫が人類の歴史生活の現實の真相を道破せるものとして、之に重要な意

義を認めざるを得ないのである。人類の如何なる理想も、人類の生活の基礎たる物質生活への顧慮なくしては、到底現實に於て實現されないであらう。人類の生活の是の如き物質的基礎を究明することなく、單に其の上部構造たる價值觀念のみを強調する所の批判主義歴史哲學は、此の點に於て明らかに其の觀念性を露はしてゐると云はなければならない。凡ゆる理想主義歴史哲學が然る如く、批判主義歴史哲學も亦茲に於て、一定の限界に逢着せざるを得ないのである。吾人は之に對して何等の抗言をも爲さんとするのではない。否寧ろ從順に之を承認せんとするのである。然し乍ら人類の歴史生活の現實に立脚して立論する唯物史觀と雖も其の窮極の意圖とする所は、人類の物質生活の解放を通じての其の精神生活の解放であり、精神王國の建設であるとするならば、理想主義歴史哲學が如何に其の觀念性の故に現實變革の實行力を發揮し得ずとも、而も人類歴史が窮極目標として進む可き理想社會を吾人に向つて指示する點に於て、依然として吾人によつて其の重要な意義を認められなければならない。然らば人類歴史が窮極目標として目指す可き理想社會は抑、如何なる構造を有するものであるか。吾人は次に批判主義に於ける社會概念に就て考察しなければならない。